

集いや交流 地域力の糧に

「この先も高校生に女鳥羽川清掃を手伝ってもらえるだろうか」。松本市の中心市街地、大手4の市下町会館の2階会議室で、地元の上土町の町会役員が真剣な表情で話し合っていた。

上土町には現在、82世帯・141人が暮らしているが、小学生は2人しかいない。最も人口が多かった頃の昭和30（19

未来をひらく

55）年は148世帯・658人だったので、人口減と少子高齢化が顕著だ。町会では長年、春と秋に女鳥羽川の草刈りを行い、美化に努めてきたが、高齢化で草を上手に上げる作業も厳しくなってきた。3年ほど前から南安曇農業高校の生徒が手伝ってくれているが、「つながりのある教諭が異動してしまえばどうなるか」と心配する。毎年開いている夏祭りも、昨年は新型コロナウイルスの影響で開けなかった。大島宏町会長（66）は「住民同士の接点がな

⑧ 自治会の活動 どう育む

くなり交流が希薄になる影響は大きい」と話す。それでも上土町の場合、下町会館でカフェを運営して住民の憩いの場になっているのは強みだ。市内の入山辺や生坂村の農家が野菜を売るなどして外との交流もある。

上土町では17年前から松本大学の学生たちが地域づくりに関わる学習を続けている。ゼミを指導する白戸洋教授は「上土町は学生に頼らない。自分たちでやる気風がある」と印象を語る。地区内には多くの店舗があるが、その大半は職

住一体ではなくなっている。そうした昼間人口の減少も、若い経営者らに昨年、学



下町会館の1階で運営されている「カフェあげつち」。住民憩いの場であり、自治の実践の場でもある

ちが予想以上に街に対する思いを持っていることがわかった」といい、町会の役員もそこに期待を寄せている。

3月まで市中央地区地域づくりセンター長を務めた勝家隆さんは、人が集まる「場」と「機会」を設けることの大切さを指摘する。しかし、そうした場や機会のない自治会はどうすればいいのか。難しい課題だ。

白戸教授は「震災などの経験から地域のつながりに不安を感じている人は多い。でも、自分の問題をみんなの問題として共有するプロセスがないと自治は育まれない」と話し、「共通する課題、テーマを作り直すこと。そこで公民館の役割が重要になる」と指摘する。

(柳 純一)

みんなの一言

・役職を受けてくれる人が少ない。地域をもり立てる勢いが減っている。地域の連帯感や絆がどんどん薄れていく印象が拭えない。働き方が変わり、定年も延び、仕事にウエートがかかっている部分もある。

(安曇野市明科七貴、無職男性、78歳)

※市民タイムスのHPなどのアンケートより



市民タイムス創刊50年